

香 蘭

香 蘭

2019年(平成31年)1月号
第96巻 第1号 通巻1057号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(41)	伊藤(美)・坪倉・鈴木(桂)・西野・石井・坪・横山・大井田・朝香	41
作品一特選		4
一		2
二		22
三		31
推薦香蘭集		39
香蘭集		40
特別転載 「日光」時代の川田順氏	村野次郎	18
村野次郎への旅(106)	千々和久幸	20
歌の生まれる場所(73)	小山ヨシ子	30
エッセイ・自由研究 文語口語併用歌考(序)	渡辺礼比子	44
焦点 点(十一月号) 何かが起こり、始まる日々の歌	今村すま子	46
作品一特選欄評(十一月号)	千々和久幸	48
作品一	高橋登喜	50
作品二	菅沼はる子	52
作品三	加瀬喜美江	54
香蘭集	市川義和	56
七首抄(十一月号)	山中・鈴木(栄)・能城・大田	58
緑地帯	小林(ま)・今井(富)・佐藤(孝)・古野	59
明宝研究会第一〇〇回十月例会	牧野道子	62
他誌拝見 97	飯野智恵子	68
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き	沖 ななも	69
転載 桜井京子歌集『超高層の憂鬱』評		72
歌会及び会合・会員消息・他		74
故・西沢前選者 追悼号予告・原稿募集		79
編集後記・新宿日記		80
表紙絵	中村陽子「鏡を置けば」	表三



2019年(平成31年)1月号

第96巻

第1号

通巻1057号

春いまだとどこほるらしわが庭の

梢をさらぬほけし鶯

個性的な囀りで、多くの人にその名を知られる鶯。晩秋から初冬にかけて民家の庭を訪れ、春はまた山野へ移動するその習性は、今も昔も変わらない。

村野先生も、冬の庭の鶯をそれとなく楽しみに春を待つ日々。

昭和十年代のこの作品。

先生は殊の外、春への思いを強くする事情があったように思われます。

因らずも、ほけし鶯との表現にその思いがあらわれていて親近感を覚える。

敗戦後、大きく変わった世の中で、変わる事なく冬の庭を訪れる鶯に、歌の舞台を先生と共有しているような楽しさもある愛誦歌です。

著名人のエッセイや、文学にも、度々現われる鶯。時に目白とその色を間違われつつ、今後も鶯のいる風景が失われる事のないよう、希うばかりです。

〔長歌新聞社文庫版「鶯風集」9頁所収。「村野次郎三百首」には取められていない〕

『鶯風集』

四 選 者 の 作 品

小 火 平塚 千々和 久 幸

奥のあのテーブルに居るのはQ氏だがわざわざ立つて行くほどでもないもういいかいああもういいよ 生返事してぐにやくにやの平成終る神のほか予知をし得ざる小火としてわが生はあれいましばらくをこの世にはどうにもならぬ事がある あるよねえ猫の首撫でながら惻隠の情など当節流行りません 教え子たちに励まされいついくばくかはわが事に触れ三日後に挨拶程度のメール届けり酒食らいゼニならぬ歌書き連ねなすことのなく連休終る片割れ月バスの窓より眺めつつ病棟の妻を見舞いて帰る

盗 人 萩 東京 桜井 京子

赤、赤、赤こんなにかいた彼岸花あの世の秋は賑やかならめ別名は唐梨、木木瓜、安蘭樹 花梨ははまだ樹の上である 銀杏のなるはうの樹が伐られたり散歩路にもうぎんなんあらずいくばくか邪心のありや草はらに盗人萩がいま花ざかり夜の窓の高きところに差し掛かるまどかなる月なにか言はぬか風の夜の深夜ラジオに聴きあしは。旅の夜風。かまた寝てしまふ

あまたるき匂ひがひと日ついて来る衣類の匂ひは洗剤でなくあれもせむこれもせむとて退屈な鉦叩き鳴くわれの何処かで

〔和歌〕の棚

横 浜 渡 辺 礼比子

あまとぶや野鳥図鑑を抜け出せるメジロの腹は汚白色ですイルアイーボの艶めく声に熱上ぐるわが友誰も離婚せざりき横浜市図書館は〔和歌〕の棚に並む「人間ラララ」も「シンジケート」もパソコンにスキヤナを繋ぎ誕生日祝とすらし花束はなし誕生日に間に合わぬとてとりあえずギフトのバッグの写メを送り来わが母を託するホームの食堂に七並べせり 負けねばならぬカピバラの昼寝を撮れば写り込むわが影はうし不眠症なり昨夜打ちしメール見直し削除せり君の負担にならん一語を

晩夏の光

鎌 倉 香 山 静 子

たつたひとつ咲きたる藍のあさがほに晩夏の光は斜交ひに射すただならぬ暑さの過ぎてさわやかな風の呼吸を朝々に聞く芙蓉一花大きく咲けり晩夏の庭にうすべにの体を張りて小池光の歌集一冊読み終へし身は秋風に吹かるごとし伸び放題の草にすがりて動かざる朽れ色をなすあはれこほろぎどんよりと曇さ漂ふ夕暮の池に緋鯉は水を載りゆく散歩をすれば短歌の材料落ちてると聞けどどこにも落ちてはをらずもう誰も待つ人いないふるさと思へど聞こえる冬の波音

作品一特選



(一月号作品、五選者共選)

深いブレス

川崎 伊藤 美恵子

もう死んだ人が深いブレスするマリア・カラスの（お父様にお願ひ）
シチリアの土産のウチワサボテンのチョコレートみんな黙って齧る
まだ固き柿の実取りて日に当てる早よう赤くなれ 父も柿好き
生まれ家は外堀通り一本を入ったところ場所だけがある

日溜りの秋の終りのねこじゃらしほっとしましたというように揺れる
自販機をゆるがしながら下りてくる麦茶は無糖カフェインゼロで
早くから牛のスネ肉火にかけてシチューになるころ食べたくなる
西沢先生 ふじみ野 坪倉 寛

難病のすすむ過程をさうですかと聞くほかになく数年が経つ
「この道はいつからこんな坂だった」一息入れつつ言はれしあの日
もしかして最後になるかも知れぬからと点滴終はりし手を出されたり

赤城山

習志野 石井 雅子

赤城山の長き裾野の町にゆき病む姉に会ふ 瘦せてしまひし
それぞれの事情抱へて一人づつ高速バスの座席にすわる

赤城山のみもとをはしる両毛線 朝はぎつしり生徒を運ぶ
こはい願はダメですやはらかくヨガはアルカイックスマイルをして
台風が近づいてゐる駅前はどこか淋しい秋祭りなり
出来さうで出来ないことの増えてゆくラムネのビー玉転がしてみる
「死ねないの」五分の電話に先生は幾度も言ひて 言葉うしなふ

寂しさに似て

東京 坪 裕

内臓を見たくはないか秋の陽に熟れた柘榴を見ればわかるさ
江戸の世も見てきただろう洞のあるけやき大樹は葉を繁らせる
脈脈といのち受け継ぎデボン紀よりシーラカンスは深海に棲む
静かさは寂しさに似て三越の喪服売場に秋のきており
ほしいものそんなに沢山ないけれど千手観音に手を合わせたたり
観光バスに戻りし少女は縄文の土隅のように眠りにつきぬ
本当の古里なりしか亡き母の分骨をする東本願寺に

風が落葉を

宇都宮 横山 慎夫

公園の段差に影が蹶いた落葉を風が浚っていった
政策より手法が政治の世の中に死んだふりして薄目を開けて
人間の役目大方終えたらば美酒と美食にうつつを抜かす

掛けるたび「留守番サービスにつなきます」その時すでに在ざりしか
スラックス姿はついぞ見せぬまま大正生まれの師は逝きにけり
あの細きからだのどこに秘めぬしや人一倍の太き気骨を
常日頃の望みのごとく簡潔に世を去りしかな西沢選者は

風

西宮 鈴木 桂子

炎熱のはてり残れるビル街をぬけて涼しき風の吹き来る
ただ暑き一日の暮れて赤き月窓に来てをりをいたく静かに
手の平ににぎりてみれば心とく例へば木の実例へば小石
唯に暑き日を重ねつつひぐらしの鳴くをきかざるままに夏逝く
オリブ油たらしめてパン食む楽しみを一つ加へて晩年に入る
古稀を過ぐつんのめりつつ生きて来し夫亡きあとの子らと私と
鈍いとか分つてるとか子に言はれつつわが脳の劣化進めり
ポテトチップ 東京 西野 美智代

特上と味も器も変はらざる老舗のうなぎ並を頼めり
B面の方が沁みたり「君恋し」表を凌ぐヒットになりぬ
君もまた独りなんだね こなごなのポテトチップを掏つてくれる
ゆく秋の各駅停車我孫子行き歌会の期待ふくらませゆく
卓上と同じSHARPの電子辞書 高野氏引けばわれも叩けり
十四日まえには声を交はしたる人の葬りに帯が結べず
送りたる歌集よろこび給ひしが今宵遺影となりて微笑む

親指と人差指で丸作りスバゲティ計る昼食の為

補聴器という魔物あり音という音がむしやらに捉えて寄こす
夜となれば物音一つないわが家宇宙の果てかそのまた果てか
三合の酒にほろ酔い五合で天下を盗ったようなふつつか

美男 葛

川崎 大井田 啓子

繁りたる桜青葉を頼もしと見し日もありぬ今うつつたうし
ゆたかなる若葉そよがす美男葛に見え隠れする太き幹あり
レンゲソウ小川アメンボ戦闘機はるかなれども近し昭和は
花びらを半分虫に喰はれたるガーベラ花壇にすつくりと立つ
お隣の車のドアの開まる音かすかにありぬ真夜のしじまに
明朝に夫と緑茶を飲みながらやつぱり私はコーヒーがいい
並び咲くノウゼンガツラ、サルスベリ色違ふればそれぞれに美し

日かげ月かげ

東京 朝香 ふさ枝

わが部屋が一階に移るのみなるにこころ寂しも尾花の揺るる
階段の上り下りのこれからを見据えて老の日かげ月かげ
円かなる月の光の照る道を貰い湯に行く娘の待つ家に
改装のわが家手がける親子の大口おおかた息子の指示に従う
移りたる部屋の居心地たしかめてこころ新たに夕空仰ぐ
窓の端に秋明菊の花ゆれて慎ましさと一言葉をひろう
間に合うと思ふ心を戒めて黄にかわりたる信号を待つ

村野次郎への旅(106)

わが青春の村野次郎(106)

千々和 久 幸

さしもの「危険な夏」も十一月に入ると、
周辺に秋色が深くなる。人間の営みに関わり
なく、季節は確実に動いていく。

1965(昭和40)年11月号の先生の巻頭
歌は、「ピラカンサスの道」八首であった。

①トラツクのあげしほこりが道路より生垣越
えて庭芝に這ふ

(トラツクのはこりが白く道路より生垣越え
て庭芝に入る)

②闇をゆく愛語きこえし夜もありき生垣にそ
ひ落葉敷く道

③客に出す支那そば出前まだ来ぬと萌えし生
垣のびあがり見つ

(支那そばの出前来ぬかといくたびも萌え
し生垣のびあがり見つ)

④散りかかる桜はなやぐ時ありき四角につづ
く刺の生垣

(散りかかる桜はなやぐ真四角に對られてつ
づく刺の生垣)

づく生垣の上)

⑤生垣の奥にくもの巢光りつつ目につきがた
き生を営む

⑥生垣の根方を分けて野良犬の腹すりくぐり
かたまれる土

(生垣の根方を分けて野良犬の腹すりくぐり
土かたまれる)

⑦冬近きピラカンサスの垣の実が花無き庭に
ひとり黄に訝ゆ

⑧疎になりしピラカンサスの刺の垣水雨に光
りて来る日近きか

(まばらなるピラカンサスの刺の垣水雨に光
りて来る日近きか)

今月の一連は、「自宅の生垣のピラカンサ
スを詠まれている。平穏な初冬のある日に目
を留めたピラカンサスを、愛着をもって詠ま
れ親しみ深い。先生にもこんな寛いだ日があっ

たのだと、心惹かれた一連であった。

①の歌、「香蘭」初出を読んだ時、結句の
「庭芝に這ふ」の凝りようが気になっていたの
だが、歌集ではあっさり「庭芝に入る」と手
直しされている。これですっきりしたのだが、
新たに「ほこり」に「白く」と説明的な表現
が付加された。

わたしには過剰な気がするが同時に、「あげ
し」が削除された「トラツクのはこり」が気
になった。意味はこれで分かろうが、表現と
しては舌足らずではあるまいか。

②の歌、真つ先に目に飛び込んで来たのは
「愛語」である。この時代に「愛語」はよく使
われたボキャブラリーである。短歌の総合誌
などでも「愛語しきりにはかなき夕べ」、など
という洒落た表現があつて、感心した記憶が
ある。わたしも「愛語乾けり」、などと真似て
使つたかも知れない。

歌意は「生垣にそひ落葉の道」を「若い男
女の情愛(愛恋)にまつわる言葉」が通り過
ぎて行くのが「聞こえた」と読める。

だがそれは「愛語」の本来の意味からは逸
脱している。広辞苑に「愛語」は無いが、ネッ
トで検索すると「愛語」とはこうである。

仏教を實踐する人が人々をひきつけるため
にそなえるべき4種の美点→四摂事の一つ。
愛語摂という。あたたかい心のこもった言葉
をかけること。これによつて人々に接近し、
彼らを悟りの境地に導く。

(ブリタニカ国際大百科辞典)

ついでにその四摂事は、「広辞苑」にこうあ
る。

「仏」菩薩が衆生を引き寄せて救うための
四つの行爲。教えや財物を与える布施摂、優
しい言葉を語る愛語摂、相手のためになるこ
とを行う利行摂、相手に協力し助けの手をさ
しのべる同事摂をいう。四摂法。四摂。」

だいが遠回りしてしまつたが、先生の「愛
語」も恐らく思い違ひだろう。

③の歌、今月の一連では、この歌を長く記
憶している。支那そばの出前を待つ心理が、
エーモラスに活写されて間然するところがな
い。生垣を介在させた場面の設定が一首を盛
り上げている。

初出は歌集では推敲されているが、説明的
な初句を削除した歌集の方が断然良い。
④の歌、揺るぎない構成の③の歌を読んだ

直後では、何となく間延びした感じを禁じ得
ない。全体が平板な叙景に終っているからだ
ろう。事柄は分かるが、こころというアクセ
ントが見えないからである。

「桜はなやぐ時」は回想であろうか。一連が
眼前の事柄だけに、少しく気になつた。

⑤の歌、結句の「生を営む」は、時折先生
の歌に見られる、情愛を込めた観念的な表現
である。この情愛の眼差しが、生な観念を膨
らませる(硬さを緩和する)のだ。観念語を
一首に溶解させる先生の技法の一つである。
ただしここではそのストレスのところ、
理屈っぽさが残つたという印象である。

⑥の歌、四句の「すりくぐり」は見馴れな
い言葉だつた。「擦り」+「潜り」と読めば意
味的には理解できるが、広辞苑にも「ネット
で検索しても」見当たらない言葉なので、そ
う読んでおく。

内容的には、野良犬が生垣に分け入り、腹
をこすりつけてその下を潜つたので土が固
まつた、ということだろう。

難儀をして読んだものの、それ以上のイメー
ジが広がるといふ歌ではない。先生は野良犬
の習性に興味を覚えられたものが。

⑦の歌、大方の花は枯れてしまつた荒涼た
る初冬の庭に、生垣のピラカンサスの黄色い
実だけが鮮やかに芽えている。そんな情景に
先生は心を動かされたのだろう。

ピラカンサスの黄は見たことはないが、赤
い実とは違つた雰囲気を醸成するのだろう。

⑧の歌、先生の歌にしては、四、五句の息
遣いがリズムに乗りにくい。ピラカンサスの
垣にもやがて氷雨が来て、刺のある実が光る
日も近いだろうというのが主意。

やや回りくどい表現が、内容以上に作品を
説明的にしてしまつた。

この時期の「香蘭」の編集は、総じて固定
化していて新味に乏しい。手堅いと言えはそ
うだが、誌面に漲る意欲が乏しく凡そ刺激的
ではない。自戒をこめてのことだが。

わたしの作品は今月も「香蘭」にない。作
らないと、読むこともしない。短歌は休眠状
態だつたが、わたしはせつせと現代詩を書い
ていた。わたしの第一詩集『恋唄』(沙漠詩人
集団)が出たのは、1965(昭和40)年6月。
詩を書き時評、時評を書き批評会に出て喋る
ことの多い、多忙な毎日だつた。